

2020.02.02

「主の祈り」4

「私たちの負い目をお赦し下さい」

マタイによる福音書 6 章 12 節

6:12 わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。

+++

前回は罪の赦しということについて考えました。今回は主の祈りの中の「私たちの負い目をお赦し下さい」という

文章を考えてみたいと思います。

1) 私達の負債

「私たちに負債のあるものを赦しましたように、わたしたちの負債をもお赦しください。」という祈りは「私たちが赦さなければ、救われない」というふうに一般的にはとられがちですが、「恵みによる救い」という視点から考えたら、それこそ的外れだと思えます。

ある学者は「私たち、人間同士（たとえば親子）が互いに赦しあって幸せを味わっている、それと同じようなしあわせを、神様、あなたとの間でも味あわせてください。」と理解しています。

つまり、子供は生まれた時から、しばらくの間、親に依存し、ある意味で「負い目」と考えられるような生き方をします。しかし、親は子供に負い目と感じさせることなく、丁寧に大切に子供を愛し、ある意味で「子供にかかった負担や負債を赦し」ています。

極論すれば、私達が子どもたちを愛し、子供の負担を負担とも思わず愛してくることができまし

た、父なる神様、どうぞ、そのように私達に対してもお取り扱いくださいという祈りと重なるというわけです。

親が子供を寛容な眼差しで見ているように、どうぞ、寛容さをもって取り扱い、お赦し下さいという祈りと理解することができます。

7:9 あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。7:10 魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。

7:11 このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。(マタイ 7 章 9 節～11 節)

この祈りは心がほっとする祈りです。

「私たちの負い目をお赦し下さい。私たちも人を大切にし、人を愛します。」というふうに理解できないと、この祈りはここで詰まってしまうように感じます。しかし、この祈りはそれだけで終わるものではありません。赦しについての具体的な事例をイエス様が紹介しておられるからです。

2) 神に赦されたものの祈り。

赦しがことさらに強調されているのは、すでにこの赦しのなんであるかを知っている者たちへのメッセージだからです。

本当に「神に赦されているあなた」は「他者を赦しました。」という証しを見せることができるはずだという考えがあって当然です。

具体的な例話として、マタイによる福音書 18 章 21 節から 35 節の読んでみます。

ここに出てくる貨幣の価値ですが、1 タラントが 6000 デナリ。1 万タラントは 6000 デナリの 1 万倍。ちなみに 1 デナリが当時の一日分の日当に相当すると言われていました。

ということは 60,000,000 日分(6 千万日) それは (16 万年分) の給料に相当する額となります。

それだけの負債を赦してもらったこの人の驚きと喜びはどうだったでしょう。しかし、そんな彼が自分の仲間に貸した 100 デナリを赦すことができないのです。

100 デナリとは 3 ヶ月分の日当にあたります。王に赦された額の 60 万分の 1 です。

例えていえば 1 千万円赦免された人が、16 円の借財を赦せないということになります。

せっかく大きな負債を赦されたのに、「小さな負い目を赦せない」ということで「赦された喜び」がまったく伝わってきません。

人を赦せないということで「私たちが神に赦されている」という現実的な喜びや救いの真理、救いの現実がまったく「証言」できていないことになるのです。

しかし、ここに人間の本性があるように思います。私たちは本当に人に貸した 10 円を帳消しにできない存在なのかもしれません。

自分にとって、その 10 円こそ怨恨の根っこになり、傷の深刻な原因になってしまうことがあるからです。額が問題ではなく、いくらであっても、自分への負い目を赦したくない気持ちがそでってしまうのです。

3) 赦すことと痛み。

それが 10 円の負債を赦免する行為だとしても、そこには必ず何がしかの犠牲が伴います。損害が生じますから。ですから、そんなことが赦せないなんて、と他者を笑うことは私達にはできません。

私達全てにとって、自分が損していることを帳消しにして、赦しますと心から発言することはとてもむずかしいことなのです。

感情的に考えても、その損害や傷は赦せないでしょう、そもそも赦そうという心も持ち合わせていないのかもしれませんが。

痛みが、そして損害がそこにあるからです。

4) キリストはいのちを代価として支払った。

実は、私達の神に対する負債、神に対する損害、存在自体の的外れをキリストが十字架の上で処分清算し、神との和解をもたらしてくださったことはちょうど、王が 1 万タラント赦してくださったことと似ています。

イエス様がいのちをかけて私達のために弁済してくださったことにより、神との間の和解が成立しました。そこには「いのち」という意義性が必要でした。イエス様は、私達への愛をもって、それを喜んで実行してくださいました。

神が私達を赦すために提供してくださった、犠牲・代価の大きさを自覚すること自体簡単なことではありません。

もしかすると、わたしはそれほど悪くないと思っ
てはいないでしょうか。先週のメッセージにもありましたが、私達の存在自体が的外れ、神への冒瀆的な存在となっています。

わたしの神に対する負債は 100 デナリ程度で、あの人のわたしに対する負債が 1 万タラントだと勘違いしていないでしょうか？キリストの痛みと犠牲を深く吟味しながら、赦すところを求めたいと思います。

私達は肉の力で頑張ってもなかなか人を赦すことはできません。赦すべきことがわかっているのに赦せない自分を、そのまま神様の前に表明し自らの罪の深さを自覚し、神のあわれみを乞うことが重要になってきます。

怒りや憤り、赦せないという感情的な動きのすべてをそのまま「人にではなく」「神様に向けて表

明する」事ができたとき、赦しの第1歩がはじめられたと言えるのではないのでしょうか。

だからこそ、私たちの負債をお赦してくださいと祈りつづける必要があるのです。

加藤常昭先生が「マタイの福音書」についての著書の中で「神に赦されたことを知っている人は、その赦しを自分の生活の中にどう映し出すかということだけに心を向ける。その時、もはや、他人が自分を赦すかどうかと、他人の愛を押し量ることをやめ、自分もまた人を赦し得るといふ喜びに生きる。

たとえ、あの人はまだ赦さないとしても、「わたしは赦しているのに、あの方はまだわたしを赦さない。」という喧嘩を捨てて、神に与えられている赦す心を生きるのです。人と私の間でちょうど釣り合いの取れた、赦しあいが起こり、そこで計算が合うのを期待するものではありません。

神が、私を赦してくださったことで、その計算はすでに済んでいるのです。」と書いています。まさに、そのとおりだと思います。

「主よ。人をありのままですなずき、人を赦せる喜びと人に赦される喜びとをわたしに教えてください。そしてそれによって、主の祈りの言葉を心から祈れるようになりますように！」

「私達の罪をお赦してください。私達も人を赦します」アーメン